

## 第2章 質的研究——なぜ、いかに行うか p13-28

### 1. 質的研究の意義:理論モデルからは明かせない現実社会

■ 大きなナラティブ（物語／語り）と理論の時代の終わり
- 演繹的方法（既存の理論モデルから研究の設問と仮説を導き出して、それらを実証的データと比較・検証）
→ 多元化する世界、既存の考え方や理論が通用しない
■ 限定付きナラティブ
「研究対象の生活領域の中で現に起こっていることを、自分にとってあたりまえのこととみなさないという姿勢」(Blumer 1969: 33)
- 帰納的な研究の戦略（問題を大まかに示すだけの「感受概念」を出発点とする）

➤ 量的・演繹的方法を用いる場合とは逆に、実証的データから新たに理論を生み出す点

### 2. 量的研究の限界を出発点とする

■ 自然科学の厳密さを模範とするがゆえに採用されてきた量的手法
- 一般化した結論を出せるよう、サンプルの代表性を高め、現象発生条件を統制。
- : 研究対象者の主観的見方・研究者じしんの主観性の排除→客観性確保のための努力
■ 研究とは客観的であるべきだ、との理想が崩れ始める（ボンズとハルトマン）
- 社会調査の結果が政治の現場や日常生活に還元され活かされる道は予想外に狭い
- 客観性の理想は具体的な研究の実施場面では、部分的にしか実現されていない
➤ あらゆる方法的な統制にもかかわらず、研究にかかわる者の利害関心や社会文化的な背景が、研究とその結果に影響することは避けられない。
「客観的に正しい命題」という観念をもはや無批判に受け入れることはできない。

➤ 人（主体／主観）と状況に結び付きのある主張を、実証的に根拠のある形で生み出すことを質的研究は目指す

### 3. 質的研究の基本的特徴

#### ① 方法と理論の適切性

- 実験やサーベイは、明確な因果関係のモデルに従って行われるべきとされてきた。
  - 事象は相互に依存し合って、複雑な織物をなしている：現実の中で出会う多くの事象の研究をあきらめなければならなくなる
  - 文脈条件を考慮に入れた量的研究のデザイン（方法上の抽象化）は、研究結果を調査対象の日常状況へ再導入することが難しい
- 研究対象に対する開放性
- 現実において見られる現象を基準に研究方法が選ばれる

- 対象は統計で用いられるような変数に還元されるのではなく、その複雑な姿のままに、自然な日常の文脈で研究される
  - 考慮すべき点は、
    - 研究結果は実証的な資料に基づいているかどうか
    - 方法は研究対象の特性に照らして適切に選ばれ、用いられたかどうか
    - 研究結果は現場や日常生活との関連性が高いかどうか
    - 研究のやり方に関して十分省察が加えられているかどうか

② 研究参加者の視点とその多様性

精神疾患を例とした研究	
量的研究	質的研究
<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 一般住民の中での発症率</li> <li>・ 患者の分布</li> <li>・ 相関の方向性は不明               <ul style="list-style-type: none"> <li>- 社会階級⇔精神疾患</li> </ul> </li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ いろいろな立場の関係者（患者、その家族、専門家）の持つ視点の多様性を明らかにする</li> <li>・ 特定のフィールドで精神疾患に対して参加者たちがどんな行為をするのか</li> </ul>

- さまざまな要素が個別な具体的な文脈から分離されることなく描写され、説明される
- フィールドで出会う人々のものの見方や行為の背景にある多様な主観的立場や社会的背景を考慮に入れて検討する

③ 研究者と研究とのリフレキシビティ

- 研究者が研究に関する自身の省察をも知を算出するプロセスの一部として取り入れる

④ アプローチと方法の多様性

- ・ 理論と方法は一枚岩のものではない。
  - 理論的アプローチ（1）主観的な視点に着目
  - 理論的アプローチ（2）相互行為の形成と進行に焦点
  - 理論的アプローチ（3）社会的フィールドや行為の背後にある隠れた意味の構造の再構成を目指す

4. 質的研究の歴史

「ハード」で、実験的で、標準化と数量化を目指すアプローチ	
ドイツ社会学内での論争 モノグラフ的アプローチ(帰納的な方法と事例研究が特徴) VS 実証主義的で統計的なアプローチ	アメリカの社会学：シカゴ学派の影響力 バイオグラフィー法、事例研究、記述的方法
「ソフトで」、理解とオープンさを特徴とする質的・記述的方法へ	
1970s アメリカでの批判がドイツへ	1960s 標準化と数量化志向の社会調査批判
質的研究のルネサンスへ	

## ■ ドイツ語圏での発展

- ・ ユルゲン・ハーバマスによるアメリカ社会学（ゴッフマン、ガーフィンケル、シクレール）の展開の発見と紹介
  - エスノメソドロジー
  - 象徴的相互行為論
- ・ グレイザーとストラウスによるグランデッド・セオリー法の脚光（1967）
  - 研究対象により適した研究方法を用いようとする流れ：「開放性の原則」
  - 「調査対象に関する理論形成は後回しにすべし」

→ 研究対象が研究方法に無理に押し込まれるという弊害を避け、研究の中で「日常生活をありのままの姿で捉える」ことが可能に。
- ・ アメリカの輸入に頼らない独自の議論（1970s）
  - インタビュー、分析、方法論一般
- ・ 質的研究の発展（1980s）
  - ナラティブ・インタビュー
  - 客観的解釈学
- ・ 妥当性と研究結果の一般化可能性の問題に関する議論（1980s 半ば）
  - 研究結果の提示と研究の透明性の問題など

質的方法を統合し  
確実なものにしよ  
うとする方向

## ■ アメリカ合衆国での発展

- ・ 伝統的な時期（20世紀初頭からWWII）
  - マリノフスキーによるエスノグラフィー
  - シカゴ学派の社会学
    - ・ 「異なった集団」を対象にした調査
    - ・ 対象を客観的に記述し、解釈を付け加えることが主流
- ・ モダニズムの段階（～1970s）
  - 質的研究の形式化の試み
- ・ 「薄れゆくジャンル」（～1980s 中期）
  - さまざまな理論モデルや、研究対象への態度、方法論の混在  
象徴的相互行為、エスノメソドロジー、現象学、記号論、フェミニズム…
- ・ 「表象の危機」
  - 研究で得られた知見と結果を記述することが、研究プロセスの本質的な部分であり、研究結果を構築するような重要性を持っていることが認知されていく
  - さまざまな解釈可能性：質的研究における評価基準に関する問題
- ・ 第五の時期（1990s）：ポストモダニズムの影響
  - 大きいナラティブがもはや成り立たないという認識
- ・ 第六の時期
  - 実験の段階の後における執筆
  - 質的研究と民主政治の論点を結びつける試み

- ・ 第七の時期
  - さまざまな学術誌などによる質的研究のさらなる確率
- ・ 第八の契機
  - 「証拠（エビデンス）に基づく実践」

研究方法によってもたらされると考えられてきた確実性を批判的に問い直す傾向

## 5. 近代の終わりにおける質的研究

- ・ 質的研究の復活は時代の要請
  - トウルミン：口述されるもの・特殊なもの・ローカルなもの・時間的なものへの回帰を哲学や科学一般が今後向かうべき道として示す
- 具体的な事例を、その時間的、地域的な特性において分析する
- 日常の文脈における人びとの発言や行為を出発点にする

## 第3章 質的研究と量的研究 p29-43

### 1. 質的研究と量的研究との関係

- 「正しい」科学観をめぐる論争から、両研究戦略を組み合わせる立場も生まれつつある。
  - ・ パラダイムの違いを強調する指摘：実証主義対構築主義
  - ・ 研究の対象や設問に応じて使い分けのべきにとらえる立場
  - ・ 質的研究の作業やその結果を予備的なものとみなし、本来の意味での研究結果は量的データからのみ導くことができるとみなす立場（量的データはサンプルの代表性が高い、という理由付けが持ち出される）
  - ・ 量的研究に対する質的研究の優勢を主張する立場はあまりとられないが…
    - 質的研究は後になって量的研究を用いなくてもよいが、逆に量的研究は、明らかになった事象や意味の関連を説明するために質的方法を必要とする
    - 社会・政治的な性質を持った事象や関連を研究する場合、事象の複雑性ゆえに、質的方法の方が妥当性のある研究結果を導くと強調されることもある。

### 2. ひとつのデザインの中で質的研究と量的研究とを結びつける

- ・ マイルズとヒューバーマンは、4タイプのデザインを挙げる。
  - ① 両戦略の並行実施
  - ② フィールドの継続的観察を基礎としていくつかの量的サーベイの実践
  - ③ 質的方法→質問票調査→質的研究
  - ④ サーベイ→補完的なフィールド調査→フィールドへの実験的介入
- ・ 質的方法と量的方法とをひとつの研究の流れにおける異なった段階で実施するというやり方
  - バートンとラザーズフェルド：質的研究を仮説生成のために用い、後ほど量的アプローチで検証
  - 質的研究と量的研究を研究プロセスの異なった部分に位置づけ
- ・ トライアングレーション：ひとつの対象を研究するとき個々の研究方法がもつ弱点や盲点を補

い合うために、異なった方法論的なアプローチを組み合わせる用いる

- 質的方法と量的方法は補完的なものとして捉える立場

### 3. 質的データと量的データとを組み合わせる

- ・ 質的データ→量的データの変換
  - オープン／ナラティブ・インタビューでの発言を数量化：各カテゴリーの頻度を特定化し比較
  - 質的研究者が理論的に根拠のある解釈や知見の提示に努める代わりに、読者を数量的なロジックによって説得しようとする傾向として批判も
- ・ 量的データ→質的データへの変換
  - 質問票データから各回答の文脈を明らかにすることは、ふつう難しい
  - 多くの質問票でなぜ特定の回答パターンがでてくるのかをさらに説明するためには、新しく質的データを集めて取り入れる必要がある

### 4. 質的方法と量的方法とを組み合わせる

- ・ オープン・エンド／自由記入型の質問は、文脈によっては質的方法と定義可能
    - 何らかの質的研究の方法論の原則が応用されることはめったにない
  - ・ 質的データの分析：第一次／第二次のコード化の手順を経て、分類と数量化のために使用し得る変数や値の定義が導かれることがある。
- 質的および量的なデータの収集と分析方法を真に統合された形へと発展させることは未解決の問題

### 5. 質的研究と量的研究の結果を結合する

- ・ 質的・量的研究の結果を組み合わせることはより頻繁に実施されている。
  - ① 質的結果と量的結果がひとつに収束し、互いに強め合い、同じ結論を支持
  - ② 両結果はひとつの対象の異なる側面に焦点を当てるが、互いに補い合うもので、合わせることで全体像がはっきりする
  - ③ 両結果は互いに異なり矛盾する
  - ③で必要なのは、そういや矛盾の理論的解釈や説明
  - 知見を妥当化するために両アプローチが組み合わせられたのなら、③（と②）は妥当性の限界を示すものと考えられる。

### 6. 研究の評価と一般化

- ・ 量的研究の評価基準を満たしていないということで、質的研究はたびたび批判される
  - 量的研究の評価基準が、質的研究の原則や実践に合わない可能性があることを考慮する必要
- ・ 多くの質的研究は新しい洞察や理論を発展させることを目標としているので、数量的な一般化は必ずしも適当なものではない。
  - 質的研究にとってより妥当な問いは、しっかりした理論的背景の中でいかに質的な研究結果を一般化するかということ。
- 一般化を左右するサンプリングの決定の質「どの事例？」>調査する事例の数「どのくらいの

事例？」

- 「その事例は何を代表しているか、あるいはそれらは何のために選ばれたか？」

## 7. 質的・量的研究に関する最近の議論

- ・ ブライマン（1992）の量的研究と質的研究を統合する11のバリエーション
  - ① トライアングレーション
  - ② 量的研究の結果を用いて質的研究の結果を検証
  - ③ 質的研究の結果を用いて量的研究の結果を検証
  - ④ 研究対象の総合的な像を得るために両者を組み合わせる
  - ⑤ 構造的側面や量的アプローチ、プロセスの側面は質的アプローチで把握
  - ⑥ 量的アプローチにおいて推進力となるのは研究者の視点／質的研究では対象者の視点を前面に
  - ⑦ 質的研究に量的知見を加えることで、一般化可能性の問題は解決される（とブライマンは考えている）
  - ⑧ 質的知見は、量的データ瀬戸における変数間の開削を促進
  - ⑨ ある対象の領域におけるミクロとマクロのレベル間の関係を両アプローチの組み合わせで明らかに
  - ⑩ 研究プロセスの異なる段階で両アプローチを適用
  - ⑪ 質的研究を疑似実験的デザインに用いる
- ・ 「混合方法論」という言葉の示す力点
  - 質的・量的方法の実用的な組み合わせに関心
  - 両方法間のパラダイム論争を終わらせるものだとされる
    - 第三の方法としてパラダイム的な根拠づけが必要??

## 8. 方法の適切性という基準点

「質的および量的アプローチは競合的というよりも相補的な関係にある。そのときに扱っている研究設問の性質に基づいて、特定の方法を使用すべきである」(Wilson 1982: 501)」

→ 研究の対象や設問への適切性によってどの方法を選ぶか決めるべき

- ・ バウアーとギャスケル：2つのアプローチを区別するポイントは、形式化と標準化の程度の違い
- ・ 両アプローチを統合する試み
  - 順番にひとつずつ用いる（異なった優先順で）
  - 並行して用いる（両戦略の異なった独立の程度で）
  - どちらかを優位なものとして用いる（異なった優先順で）

→ 研究デザインの次元にとどまる
- ・ 適切なデザインや研究手順、データや結果の適切な評価の在り方には両アプローチの間には違いがあり、どう考慮するかは今後も求められている課題